「 炎症性腸疾患に対する治療の効果・副作用出現に関する因子の検討」

〇研究の概要

炎症性腸疾患(IBD)は、潰瘍性大腸炎(UC)とクローン病(CD)に代表される、消化管に慢性炎症を来す疾患で増悪と寛解（症状がやわらぐこと）を繰り返す疾患です。現時点で根治的治療はなく、有症状時には抗炎症療法を行い寛解状態に導き、またその後はいかに寛解を維持するかが重要です。以前は 5-ASA やステロイドによる治療のみでしたが、タクロリムスなどの免疫抑制剤や抗 TNF-a 抗体製剤といった生物学的製剤が使用できるようになり、そのコントロールが向上してきています。さらに近年は、多様な分子生物学的製剤が登場してきています。しかしながら、各製剤の治療対象となる位置付けは必ずしも明確ではないのが現伏です。これまで当院にて IBD に対して治療を行った患者様の背景、治療の奏功率、副作用、長期的な効果を検証することで、今後適正な治療の選択ができ、より良いコントロールが目指せる様になると考えられます。

〇研究の目的と方法

2010 年 4 月以降に当院通院歴のある IBD 患者様のうち当科にて治療を行った患者様を対象とします。患者様の重症度、画像所見（内視鏡検査所見、CT 所見、MRI 所見）、血液検査所見などから治療反応に寄与する因子について検討します。これらを解析し、治療効果や副作用の予測因子について検討します。
本研究は「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」を遵守して行います。

〇本研究の参加について

本研究への参加・不参加に関わらず、利益・不利益を生じることはありません。個人を特定可能な情報は解折に使用されず、データは個人情報を削除し、匿名化した状態で取り扱います。
本研究への不参加をご希望の方は下記問い合わせ先までご連絡下さい。

〇調査する内容

カルテから取得した以下の診療情報を用います。病名、性別、年齢、治療歴、検査歴、肛門病変の性状、腹部症状、血液検査、内視鏡検査、CT 検査、MRI 検査結果等。

〇実施期間

研究対象期間： 2010 年 4 月 1 日～2026 年 3 月 31 日まで
研究実施期間：倫理委員会承認後～2026 年 3 月 31 日まで

〇研究成果の発表

当研究によって得られた結果は学会発表、学術雑誌への論文等への発表をもって公表されます。

〇研究代表者

熊本大学大学院生命科学研究部　生体機能病態分野　消化器内科学講座　光学医療診療部　特任助教　古田　陽輝

〇当院における研究責任者

国立病院機構熊本医療センター　消化器内科副部長　内視鏡センター長　松山　太一

〇問い合わせ先

国立病院機構熊本医療センター　消化器内科副部長　内視鏡センター長　松山　太一
TEL:096-353-6501